

書評

宇宙の果てへの旅

海部 宣 男 著

(大和出版グリーンブックス, 1978年11月, 253頁, 690円)

一般の人たちに科学を啓蒙する,あるいは宇宙像を啓蒙するという大事業のときには,むつかしい用語をさけてやさしい文章で書くとか例え話を多用するとかナンとかいうことよりは,いかに読者に感動-実感をよびおこすかということの方がカギになるだろう。著者が働きかけようとしている目標は「人間」である。人間が心を動かされる基本には,他人の情熱が感染するとか感動をうけるとかということがあるから,ふたつのやり方があることになる。第一の方法は,人間が自然に挑戦して切りこんでいく過程をえがいて追体験させる手法である。第二の方法は“現場”につれていって,臨場感の迫力(つまり人間の諸能力のうちで大脳のみによる手段だけでなく,もっと全感覚をひろく動員できそうな接近した場所)で読者に訴えることである。本書の著者の先輩格の森本さんは「望遠鏡をつくる人々」で第一の方法をとったが,海部さんは本書で第二の方法に挑戦した。

表題のように宇宙ロケットに乗船したという臨場感をもたせて読者をひきつけていくのにどういう設定をほどこせば良いだろうか? スペースオペラ風の荒っぽいのは天文月読者クラスにはかえって興ざめだろうし,凝りすぎると,その仕掛け(しかも弁解が頻出する危険性あり)の出来栄の鑑賞の方が主題になってしまう。それにしても宇宙ロケット旅行というのは魅力ある手法である。

この本は 22 世紀のある晴れた朝に野辺山高原宇宙空

港から巨大ロケット「ペガサス」号で離陸し,月-太陽-惑星-シリウス-オリオン星雲-カニ星雲-アンドロメダ銀河-銀河中心核(複数)-火の玉宇宙,と天路歴訪する設定である。迫力ある記述は,やはり,オリオン星雲中の星生成の現場のところであった。最後に宇宙の涯て=宇宙開始時のプラズマの壁にペガサス号が突入してしまうのは面白かった。いずれにせよ記述内容をここであらためて云々し,保証する必要はないだろう。

この本で重要なことは,第二の方法を採用したため,現代の宇宙像全体の総観が味わえることだろう。全体像を感得するのを第一の方法でやろうとすると,かえって生彩がなくなってくる。つまり宇宙のことを知りたい読者に対し,著者はまず欲求不満の状態を追体験させてからようやく部分的ナゾ解きをあたえ,その積み重ねで全体像ができあがるわけである。たしかに追体験の肉感的な快感はあるが,全体像をつくるときにお説教が入りやすい。

現代の進化的宇宙像の仕上げとして,人々の実感をよびおこすキメテは,「人間」をそこに存在させることであろう。宇宙人を持ち出すことである。本書でもエティオプス星人なるものが登場し,しかも正当にも“文明の寿命の有限性”という現代的意義をもつ観点からあつかわれている。

評者の欲を言う。宇宙ロケット内の人間集団のいろいろな動きと,訪問してまわる“現場”のできごとを適当に結合して叙述したらもっと成功したのではないか? 文学作品として宇宙船内の人間集団を描写してほしいというのではない。しかし評者の分類での第一の方法の亜流に属する“船内講義”と観光バスのガイド風の手口が多用されすぎたのは不満におもえたのである。

(横尾広光)

1979年9月の太陽黒点 (g, f) (東京天文台)

1	14,	93	6	8,	133	11	13,	158	16	11,	92	21	11,	167	26	—,	—
2	—,	—	7	9,	124	12	14,	140	17	—,	—	22	14,	211	27	—,	—
3	17,	150	8	10,	156	13	11,	145	18	13,	95	23	20,	211	28	—,	—
4	11,	132	9	10,	142	14	15,	168	19	12,	95	24	—,	—	29	—,	—
5	9,	101	10	11,	138	15	13,	130	20	16,	157	25	—,	—	30	—,	—

(相対数月平均値: 190.2)

昭和54年11月20日	発行	人	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	社団法人 日本天文学会
印刷発行	印刷	所	〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町251	啓文堂 松本印刷
定価 300 円	発行	所	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	社団法人 日本天文学会
			電話 三鷹 31局 (0422-31) 1359	振替口座 東京 6-13592